

大島昇院長

渋谷駅前おししま皮膚科



過去

子ども時代の体験から
皮膚科医を目指すことに

私はエンジニアの父、母、3歳上の姉の4人家族で育ちました。両親の教育方針で、自宅にはゲームやおもちゃの代わりに本がたくさんあり、世界の文学シリーズや図鑑などを読んでいました。そんな私が小学校の卒業アルバムに書いた将来の夢は、「皮ふ科医」です。当時の私はアトピー性皮膚炎の症状が非常に重く、いつか自分も皮膚科医になって同じような症状で悩む人たちの役に立ちたいと思っていたのです。

医師になるという思いを持ち続けた私は、一人暮らしをしてみたかったこと、国立大学志望だったことから、筑波大学医学群に入学しました。

今も仕事が好きですが、当時から働くことが楽しくて、家庭教師や塾講師、引越越しや道路工事、飲食店などさまざまなアルバイトをしました。お金が貯まると、東南アジア、インドやヨーロッパ、アフリカへと旅に出たものです。子どもの頃から家族で旅をしていた影響が大きいでしょうね。医師になってからも、よく旅をしました。シャツや下着など最低限の荷物だけ持って街や市場をぶらぶら歩くのが、私が好きな旅のスタイルです。

血液内科の医師となった姉やテレビドラマの影響

Profile
Ohshima
Noboru

神奈川県出身。2005年に筑波大学医学群を卒業後、東京大学医学部附属病院 皮膚科 形成外科で初期研修を行う。2007年に東京大学医学部附属病院皮膚科助教となる。三井記念病院皮膚科、国立病院機構相模原病院皮膚科医、日本赤十字社医療センター皮膚科の勤務を経て、2014年3月に渋谷駅前おししま皮膚科を開院。日本皮膚科学会、日本形成外科学会、日本美容皮膚科学会、日本アレルギー学会、日本臨床皮膚科医会、日本内科学会。

渋谷駅前おししま皮膚科
(東京都)

待合室などは低めの家具に観葉植物を合わせることでゆったりとした雰囲気に。

現在

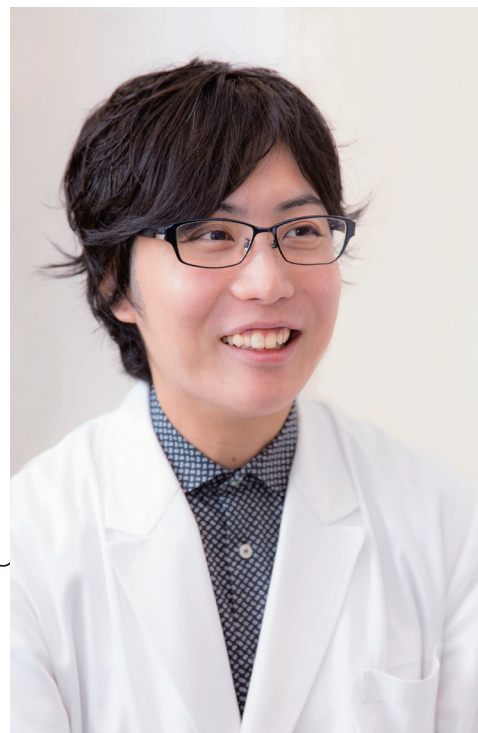
働く人も子育て中の人も
通いやすいクリニックに

私は、皮膚科は虹のようなものだと思います。日本では虹は7色とされていますが、青にも濃淡や色味の違いがあると知ると、虹から7色以上の色を見出すことができます。皮膚科医も同じで、知識があればより正確に診断ができます。そう気づいて、もともと好きだった学ぶことが改めて楽しくなり、国立病院機構相模原病院時代は2年弱で12本の論文を書き、発表しました。

私が経験を積んだ大規模な病院では、重症になってから病院にやってきた患者さんを数多く診察しました。その時、「軽症のうちに治すことが大切だ。そのためには、仕事帰りに来られるクリニックが必ずやだ」と強く感じ、開業を決意しました。

2014年、働く人でも通いやすい場所に開業し、平日は20時まで、土日とも休まず18時まで診察しています。待ち時間を極力短くしつつ的確な診断を下せるよう、非常動を含む20名の専門医が交代で診察を担当しています。また、飛行機に優先搭乗があるように、2歳以下のお子さん連れの方を優先的に診察するのも当院の特長ですね。これは、私に子どもができたことで生まれたアイデアです。

開業にあたってもう一つこだわったのが、「総合病院以上のクリニックを作る」ということ。当院では日本皮膚科学会が推奨する治療に対応できるよう、さまざまな最新機器を揃えています。私が日本赤十字社医療センター時代に乾癬の患者さんが多くいらしたこともあって、当院も多いですね。また、粉瘤手術を受けにいらつしやる患者さんが口コミで増え、開業以来、1万件以上の手術を行いました。医師としては患者さんをしっかり指導する部分も必要ですが、「医療もサービス業である」という意識で、クリニック一同「患者さんファースト」の視点を大切にしています。



「やりたいと思ったこと、導入したいと思った機器をすぐに取り入れられるのが開業医の魅力です」と大島先生。



診察室の壁に大切に飾られていたのは、小児の患者さんが描いて贈ってくれたという大島先生の似顔絵。



待合室壁にもグリーンのパネルを配置し、忙しい時間をやりくりして訪れる患者さんがくつろげる空間に。



待ち時間を減らす工夫をしつつ、待ち時間も楽しめるよう、本好きの大島先生が自ら選んだ本を並べている。

感謝

「患者さんファーストを大切に、スタッフが働きやすい環境を整えていきたいですね」と大島先生。



患者さんが感じてもらうように、待合室には「院長への直行便」の用紙とボックスを用意。

未来

同じ志を持つ仲間とともに
世の中のために医療を

「患者さんファースト」を実現するためには、質の高いスタッフが欠かせません。そこで、医療スタッフだけでなく、事務スタッフに対しても、待遇を重視しています。こうした評価制度を取り入れることで、スタッフのモチベーションも上がっているように感じます。現在、育児休業中のスタッフが2人いますので、復帰後に育児と両立しやすいよう、時短制度に加え、18時以降に勤務する場合はシッター代などを補助する仕組みを作りたいと考えています。開業4周年を迎え、現在も経営者としてさまざまな面で試行錯誤していますが、開業してよかったのは、よいと思ったアイデアや機械をすぐに導入できること。そうすることで患者さんに還元できるのが嬉しいですね。

最近ではよく、「分院は作らないのですか？」と聞かれるのですが、今は考えていません。やはり、このクリニックに対して私以上に思い入れを持っている人はいませんか、私が当院で毎日診察すること、この理念を患者さんだけでなくスタッフにも伝えていけるのではと考えています。

嬉しいことに、私の東京大学医学部附属病院の同期や後輩が当院で働いた後、開業するケースが増えています。その多くが当院のように「アクセスがよく、診療時間も長く、専門医が診察を担当する」クリニックになっています。同じ志を持つ仲間が増えることで、多くの方々が軽症のうちに医師の診療を受けられるようになるのはとてもいいこと。ですから、仲間が開業する際は物件探しに同行したり、相談に乗っています。私たちのやり方で経営できるといことがわかれば、専門医による通いやすいクリニックが一つの潮流になるかもしれません。その潮流が皮膚科だけでなく、他の科にも広がって、世の中のためになればよいと思っています。